

厳しく要求される確実な知識と論理性

日本の大学入試制度は今曲がり角にある。

高等学校までの教育は、国民の共通教養を内容として国民のまとまりを形成することが主な目的となっているのに対して、大学からの教育は、各分野で専門的な力量を発揮することを目的とした教育が行われる。したがって、この2つの教育をつなぐ試験制度は、その社会が共通教養として、また専門教育として何を求めているかを表している。現代は科学技術が日々進歩して変化が激しい社会であり、教育もそれに対応することが求められている。先進国では、どこでも大学入学試験のあり方が程度の差はあれ教育改革の重要な対象となっている。例えば、イギリスの教育専門紙である「タイムズ教育版」では、毎週試験に関する内容が大量に扱われており、試験制度も目まぐるしく変わっている。日本の大学入試制度も変化が激しく、また極めて複雑であり、これでは国民的な共通教育の形成など不可能ではないかと思われるほどである。

今日本の大学入試は大きく変わりつつある最中であるが、これまでは大学側が選抜を行い、大量の答案を処理するため、多くはコンピュータによる採点を行っていた。これは多数の学生を引き受けている私立大学が、受験者数を多くして受験料を集めること、また、受験者が定員を大きく上回っていたことなどが背景としてあった。しかし、まもなく大学進学希望者と入学定員の数が同じになり、銘柄大学にこだわらなければ必ず大学に入学できる時代が近づいてくる。そのとき、日本の大学入試はどのようになるべきであるのか、またそのなかで高校生や入学後の大学生がきちんと勉強する態勢をどのようにとるのか、大学のみならず日本の教育界の大きな課題である。入学がたやすくなるので高校生もまた入学後の大学生もほとんど勉強しなくなるような状況は絶対に避けなければならない。大学入試は単なる「選抜の道具」ではなく、高

校生がどのように勉強するかに大きく影響するものであるから、その点での工夫が今切実に求められているのである。

そうした中で、フランスとドイツの制度は、小さな改革はあるものの比較的安定しており、また求める内容についても他国とは多少異なっており、日本も大いに参考になる。資格試験であったり特別な試験がなくても、「定員」があれば競争的な性格をもつが、ドイツやフランスは基本的に厳格な定員がなく、フランスはバカロレア、ドイツではアビトゥアと呼ばれる高等学校修了試験があり、その試験に合格すると、原則として全国のどの大学、どの学部にも入学可能である。試験内容は個別の高校で管理するのではなく、国家的な範囲で行われる。しかし、個別の高校が国家の監督の下に行う地域もある。オランダは、個別の高校と国家が派遣する担当者が半分ずつの点数をもって共同して試験を行う。

日本のように、「学習指導要領」の範囲という「高校の教育内容」から出題するという制限がありながら、実際に試験問題を作成するのは大学の教師であるというのは、いかにも不自然である。高校の内容の理解度を判定するのであれば、高校の教師が参加することはむしろ不可欠であろう。ドイツやフランス・オランダでは、いずれも高校教師の参加および責任が重視されている。アメリカの全国的な共通試験のSATも、高校の教師が採点に参加している。このようなことは、日本の試験制度でもぜひ検討を要する点であろう。

さて、フランスとドイツの試験のもうひとつの特徴は、知識の量を問うことよりも思考力を重視する点である。特に、ドイツでは長時間（1科目に5時間から6時間）の時間を要して、じっくりと解かせるようにしている。ドイツでは1科目の試験時間が長く、科目数が少ない（筆記3科目と口頭試験1科目）のに対して、フランスでは科目数が多い（コー

スによって異なるが10科目前後)かわりに1科目の試験時間は短い(2~3時間)。

実際に、ドイツのアビトゥア(歴史の問題を見てみよう(下記参照))。3つの課題から1つを選択するが、時間は270分で、資料持ち込みは不可である。

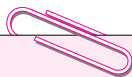
フランスのバカロレアもかなりハードな内容である。例えば、口頭試験では、あらかじめ配布されたテキストなどを素材として、試験官と議論をする。かなりの科目について筆記試験と口頭試験があり、日本の推薦入試などで見られる「面接」とはまったく異なるものである。日本の面接では、多くが「人柄」とか「やる気」を見ることになっており、実際にその人の能力を試すものにはなっていない。それに対してフランスバカロレアの口頭試験は、深く正確に文献を読んだか、掘り下げて理解しているかどうか試される。

勉強とはそうした深い理解を目指すものであり、またそのような勉強をしてこそ、楽しく勉強できるのではないだろうか。ドイツや

フランスの試験制度は大学に進学する資格をもつ高校とそうでない高校があるという格差的構造の問題はあるとしても、学ばべきところが多いと思われる。

最後に、石川工業高等専門学校主催講演会でのシゲル・ツジ(パリ第六大学教授)の言葉を紹介しておこう。

「フランスの高等学校には、哲学の時間がある。そこでは、人生の意味や外国人の労働者の問題といったいろいろな社会問題について考えさせる。バカロレアの中でも哲学は大きな意味をもつ。3~4時間かけて行われる筆記試験では、正誤よりも論理性、客観性が評価される。その分、採点は非常に大変である。こういった試験が日本にはないことを聞いてフランス人の知人は非常に驚く。そうしないと考える訓練にならないのではないかと。実際、日本人は、実験等の技術はあるが、深く考えないと言われる。国際会議に参加する人は多いが、会議をリードする人は少ない」



課題1は、ドイツのナショナリズムの形成やナチズムについてである。また、課題2は、産業革命=社会的変化と題する問題であり、課題3は、民主主義と人権と題する問題となっている。課題1については、以下の通りである。なお、課題1には、資料としてエルンスト・アルントの「民族的憎悪について」とニーチェの「帝国の基礎とドイツ精神」について、それぞれA4で1ページのもの添付されている。

課題1：19世紀と20世紀のドイツナショナリズムと国民国家の発展について。

- (1) アルントの「民族的憎悪について」の理解をドイツの状況に関してまとめ、時代背景からそれを評価せよ。
- (2) 1871年までのナショナリズムの理念は、政治的にいかなる作用を果たしたのか論ぜよ。
- (3) ニーチェの位置を、「帝国の基礎とドイツ精神」の関連で説明せよ。そして、ドイツ帝国の歴史に関する位置を検証せよ。
- (4) 国家社会主義のイデオロギーおよび政治的支配における国家的思惟の腐敗を裏付けよ。
- (5) 歴史家ハーゲン・シュルツは、政治的に単一化されたヨーロッパの理念について次のように書いている。「ヨーロッパの体制は、国民、長い歴史、諸言語と諸国家を考慮に入れたときのみ、継続的でありうる(シュルツ『ヨーロッパ帰郷』)」この引用文から出発して、ヨーロッパの問題と展望を述べよ。